Ⅰ．東日本大地震に対する昭和大学の医療救援隊の活動

昭和大学学長　　片 桐　敬

平成23年（2011年）3月11日（金）午後2時46分の大地震は，生涯忘れることのできないことであろう．小生は学長室におり，震度5強の揺れに立っておられず，ソファーに座り込んだ．壁の絵がバタバタと音をたてて揺れ，いつ停止するのか，不安な数分間であった．幸いなことに，昭和大学の職員や学生，病院におられた患者さん方などの人的資源や校舎，病院を始めとする建物には，大きな被害はなく，不幸中の幸であった．時間が経ち，テレビ放送などでマグニチュード9.0という過去に経験したことがない巨大地震であることが判明し，東北地方太平洋沿岸から，茨城県，千葉県の太平洋沿岸の大津波による甚大な被害と，福島原子力発電所の惨事が明らかになるにつれ，日本中がこれまで信じてきた安全とはいかなるものか，改めて考え直させるものになってきている．

この事態に早速動き始めたのが本学のDMAT（災害派遣医療チーム：Disaster Medical Assistance Team）のグループであり，医学部救急医学科の田中啓司助教らが，当日から早速現地に赴いていった．本学として，16年前（平成7年：1995年）の阪神淡路大地震の対応にボランティアとして活動したメンバーが早速集合し，理事長小口勝司氏が中心となって地震・津波の被害に対する昭和大学としての対応が協議された．有賀徹昭和大学病院長（医学部救急医学教授），三宅康史同准教授，木内祐二薬学教育推進センター教授など，阪神淡路大地震にボランティアとして活動したメンバーが中心になって多くの関連者が集まり，医療援助活動を行おうと，昭和大学医療救援隊本部が結成されたのが地震発生2日目の3月12日のことであった．昭和大学全体としてまとまって救援活動をすることが決定され，無力の小生が学長として救援隊本部長ということになった．この動きには小口理事長の組織力，決断力が大きな推進力となった．敬意を表する．情報の伝達が乏しい中で，医療救援隊の目的地としては仙台市以北で医療救援活動が不足しているであろう岩手県宮古市近辺ということに決定された．戸田建設株式会社および本学総務部総務課のメンバーの協力のもとで，本学の全医療組織と学生をも含めた医療救援隊が結成された．第1次救援隊長に板橋家頭夫小児科学教授，昭和大学病院副院長が選任され，戸田建設の方々の身を挺しての支援のもとで，総勢17名のメンバーが現地との電話も通じない中，3月15日（月）に岩手県を目指してマイクロバス2台で出発した時のことが三か月以上経った今でもありありと思い出される．自動車の燃料補給の不安があり，また，行く先も定まっていない不安な出発であった．結局，宮古市から少し離れた岩手県山田町に医療救援活動のベースがおかれた．また，本学のホームページに医療救援隊ボランティアの募集をしたところ，200名近くのほとんどの職種の職員・学生が応募してきた．これらの中から，第1次から第7次までの医療チームが形成され，一か月間以上の長期に亘り，岩手県山田町で継続して救援活動をすることができた．一方，残りの人々は

旗の台キャンパスに残り，後方支援のお仕事をしていただいた．また，学生有志は旗の台近辺や横浜市緑区長津田の街頭で募金活動を行い，かなりの量の義援金を集めていただいた．連日，医療救援隊の連絡会議が開かれ，物資補給などの支援が検討され，この中で学生たちの作業による後方支援が十分に作動した．

阪神淡路大地震の際にも本学から多くの医療救援ボランティアが神戸市にでかけた．往時には，大学としてまとまって行動するまでは組織を作ることができず，各グループ・各教室が独自に出向いていった．当時の医療救援活動については昭和医学会雑誌に掲載されている[1)]．今回は，往時よりはるかに広範囲の強烈な被害状況である．昭和大学の教育職員・事務職員などの全職種，および学生が一つになって医療チームを形成し，第7次医療救援隊まで3月15日から4月16日まで，一か月間という長期間に亘る総合的な医療援助を行うことができた．医師・看護師だけでなく，歯科医師，薬剤師や調理師などが一体となり，津波の被害が甚大であった岩手県山田町の初期医療の復興に尽くすことができたと思っている．また，隊員や物資の輸送・運搬にお手伝いをいただいた堀　順一さんほか，戸田建設の方々のご苦労とご援助にはお礼の申し上げようもない．ご援助なしには救援活動もスムーズにはいかなかったであろう．

昭和大学として，このように組織だった救援活動を実行することができたのは，本学のモットーである至誠一貫の流れが学内に行き渡っていることの証明である．ボランティア救援隊員として山田町のライフラインもない場所で，雪の舞う寒さの中，がんばっていただいた方々，特に初期の厳しい環境下でがんばっていただいた隊長さん，隊員の方々に感謝を申し上げる．また，現地との補給活動など大変なご苦労をしていただいた総務課の方々，地味な後方支援をしていただいた学生の方々にも厚く御礼を申し上げる．小生は，何も役にたたない老体として，会議で御託を並べるだけのことしかできなかった．

これら何らかの形で未曾有の地震・津波災害にボランティア救援活動に参加された方々は，生涯，このことを忘れずに医療人としてよりよい人生が送れると思う．これぞ昭和大学の建学の精神である社会に奉仕する医療人を育成することの表現以外の何ものでもない．地震発生以来既に三か月を経過した本日であるが，被災地の復興はまだ遠く，福島原子力発電所も危険な状況が継続している．この原稿を5年後か，あるいは10年後に読み返して見た時に，日本社会の安全の確保やこれまで経済第一主義で行ってきたものの考え方に変化が出てきたか，日本が復興した暁に今日の状況を懐かしく思い出す時になってみたいものである．

文　献

1）阪神大震災における昭和大学医療救援活動の記録　昭和医会誌　55：411-459，1995.

（平成23年（2011年）6月13日記す.）